

氏名(本籍)	こ ばやし ひろ あき 小林宏明(埼玉県)		
学位の種類	博士(心身障害学)		
学位記番号	博甲第1,991号		
学位授与年月日	平成11年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	音韻障害を併せ持つ吃音児の特徴 —協調運動発達を中心に—		
主査	筑波大学教授	教育学博士	小林重雄
副査	筑波大学教授	教育学博士	吉野公喜
副査	筑波大学教授	学術博士	斉藤佐和
副査	筑波大学教授	理学博士	岡田守彦
副査	筑波大学助教授	教育学博士	早坂菊子

論文の内容の要旨

本論文は、序論、本論、結論の3部から構成されている。以下に、各論の概要を記す。

序論

先行研究において、吃音児内の音韻障害を併せ持つ児(吃+音児)の占める比率が健常児のそれに比べて高いことが指摘されていることを示すとともに、今後吃+音児の特徴について検討を加える必要があることを指摘している。また、吃+音児の特徴について検討を加える際には、(1)発吃からの経過期間、(2)認知、言語、運動等の発達、(3)吃+音児の吃音の症状の悪化や維持をもたらしている要因、(4)吃+音児の運動制御の能力等について考慮する必要があることを指摘している。また、吃音者の運動制御能力の特徴に関する仮説的モデルの1つである Interhemispheric Interference Model (I. I. M.; Webster, 1990) について概説するとともに、I. I. M. に基づいて吃+音児の運動制御能力について検討を加えることの有効性について論じている。

本研究においては、音韻障害を併せ持つ吃音児(吃+音児)の、(1)アセスメント及び指導経過における特徴、(2)協調運動発達の特徴について、実験的、臨床的手法を併用することによって明らかにすることを研究の目的とした。

本論

本論文は、第1部と第2部の2つの部分から構成されている。

第1部では、吃+音児の非流暢性発話や音韻過程の継時的変化、認知、言語、運動などの発達の側面の特徴、吃音の悪化条件や維持条件などにみられる特徴について検討した(研究1～4)。

第2部では、第1部を通して吃+音児が有する特徴の1つとして示唆された協調運動の拙劣さに焦点をあて、吃+音児、吃+非音児、非吃児・非音韻障害児(非吃+非音児)の協調運動発達の特徴について Webster の提唱した I. I. M. に基づいて検討し、吃+音児に協調運動の向上に焦点をあてた指導を行い、その効果の検討を行った(研究5～8)。

以下に、第1部、第2部の順序でその概要を示す。

第1部

第1部は、研究1から研究4及び、総合考察から構成されている。

研究1は、発吃1年未満の吃+音児の発話の特徴を明らかにすることを目的に行われた。その結果は、(1)非流暢性発話については、吃+非音児と比較して引き伸ばしが多く繰り返しが少ないといった傾向は認められない、(2)音韻過程の出現傾向についても、吃+音児と非吃+非児間に顕著な相違は認められないというものであった。

研究2は、発吃1年未満の認知・言語・運動等の発達の特徴を明らかにすることを目的に行われた。その結果、(1)吃+音児、非吃+音児の日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査(JMAP)の成績が、吃+非音児に比べて劣る傾向が認められる、(2)The Neurological Examination of Child with Minor Nervous Dysfunction(NECMND)の結果、顕著なsoft neurological signを示した対象児は存在しなかった。

研究3は、発吃1年未満の吃+音児の非流暢性発話、音韻過程、認知・言語・運動等の発達の継時的変化を示すことを目的に行われた。その結果、(1)吃+音児に吃症状の軽減が認められない児が存在する、(2)吃+音児の音韻過程の総数及び出現頻度については、各対象児とも減少が認められる、(3)吃+音児のJMAPの結果については、各対象児とも総合点、各行動領域の得点分布の向上が認められない児が存在することが示された。

研究4は、吃+音児2名に対して、U仮説に基づいた指導プログラムを実施し、その指導経過について検討を加えた。その結果、(1)指導を通して、改善条件である発話意欲の増大や話量の増加及び、維持条件である対人的な過敏性や消極性、自己感情の表出の制御の軽減が認められたが、(2)音韻障害や全般的な発達上の問題を持つことから、悪化条件の心理的な圧力や罪障感が増大する様子が認められた。

これらの結果から、(1)吃+音児の中に吃症状の軽減が認められない者が存在する、(2)吃+音児の中には音韻障害については、幼児期段階においてかなりの軽減がみられる者が含まれている、(3)吃+音児の認知・言語・運動などの発達上の問題については軽減が認められない児が存在する、(4)U仮説に基づき吃+音児に対して吃音指導を行った結果、各対象児の言語・認知・運動能力の発達上の問題が、吃音の悪化及び維持要因として機能していることが示された。

第2部

第2部は、研究5から研究8及び、総合考察から構成されている。

研究5は、吃+音児、吃+非音児、非吃+非音児群を対象に事前に提示したパターンに従って一定時間連続してボタンを押し続けるという課題を実施した。その結果、(a)3対象児群とも、利き手については確立している、(b)吃+音児と他の2群間に正確にボタンを押した総数に有意な相違が認められる、(c)吃+非音児、非吃+非音児には年齢と正確にボタンを押す総数との間に正の相関関係が一貫してみられるものの、吃+音児には両者間に一貫した相関関係傾向が認められないことが示された。

研究6は、ディスプレイに描かれた手形に示される手指の動きをブザー音の提示の後にボタンの上で再現するという課題を実施した。その結果、(1)吃+音児と他の2群間に、誤りパターンB(構成要素の欠落型の誤り)の出現頻度に若干の相違が認められる、(2)反応時間、運動時間については、吃+音児と他の2群間に相違が認められない、(3)年齢と、誤りの出現頻度、反応時間、運動時間との相関関係は認められないことが示された。

研究7は、片方の手で連続的にボタンを押し続け、他方の手で一定間隔ごとに提示されるブザー音に続けてボタンを押すという課題を実施した。その結果、(1)課題を遂行する際の成績の左右差は認められない。(2)吃+音児と他の2群間に、干渉側の標準偏差を除く大半の課題において課題の成績に有意な相違が認められる。(3)全ての対象児群に、大半の指標において、年齢間に有意、もしくは一貫した相関関係が認められることが示された。

研究8は、吃+音児に対して協調運動スキルに焦点をあてた指導を行う効果について検討を加えることを目的に行われた。その結果、(1)ケンパ、グーチョキパー、発音の各協調運動課題の成績に向上が認められたことから、今回行った協調運動スキルに焦点をあてた指導は一定の成果があった、(2)非流暢性発話の出現頻度をみると、吃症状の悪化が認められなかったことから、協調運動に焦点をあてた指導が吃音の悪化の防止に一定の効果をもたらしたことが示された。

これらの結果から、(1)非吃+非音児と吃+音児間には、運動制御能力の相違は存在しない、(2)吃+音児には運動の配列と調節に関する問題性を含む、より全般的な運動発達の問題性が存在することが示唆される、(3)吃+音児の中に月齢の上昇に伴って正確に多くのボタンを押すのに必要な能力が向上しない一群が存在することが示唆される、(4)吃+音児に対して協調運動スキルの向上に焦点をあてた指導を行うことは一定の効果があることが示された。

結論

- I. 本研究においては、(a)音韻障害を併せ持つ吃音童(吃+音児)のアセスメント及び指導過程及び、(b)協調運動発達の特徴について検討を行った。
- II. 吃+音児のアセスメント及び指導過程を検討した結果、(a)吃+音児の予後が楽観視できない、(b)吃+音児の中に、認知、言語、運動発達等の側面の発達遅滞を呈するものが存在する、(c)吃+音児の吃音の悪化及び維持条件の1つに、認知、言語、運動発達の遅滞の存在がみられることが示唆された。
- III. 吃+音児の協調運動発達について検討した結果、(a)吃+音児がWebsterが成人吃音者に見出した協調運動機能の問題とは異なった協調運動発達に関する問題性(より全般的、包括的な協調運動発達の問題)を有している、(b)吃+音児の中に、運動能力がさらに劣る一群が存在する、(c)吃+音児に対する指導の1つの方向性として、協調運動スキルの促進に焦点をあてた指導があげられることが示唆された。

審査の結果の要旨

本論文は、音韻障害を併せ持つ吃音児に焦点を当て、発吃から間もない幼児を対象として臨床的に追跡し、また、大脳半球間の干渉説を論理的根拠とする実証的、実験的研究を展開し興味あるデータを示したところに特徴がある。

臨床的、実験的観点から厳しく検討するとやや物足りなさを感じる点もあるが、これらは今後の研究の進展によりクリアーされていくものと考えられることができる。

よって、著者は博士(心身障害学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。